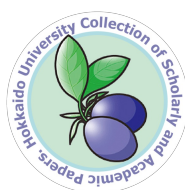




Title	思春期における思考の発達と自己および人間関係への影響 : 批判的思考態度についての縦断調査をもとに
Author(s)	加藤, 弘通; 太田, 正義; 松下, 真実子 他
Citation	子ども発達臨床研究, 5, 21-30
Issue Date	2014-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.5.21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54977
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_5_04.pdf



思春期における思考の発達と自己および人間関係への影響

— 批判的思考態度についての縦断調査をもとに —

加 藤 弘 通* ・ 太 田 正 義**
松 下 真実子*** ・ 三 井 由 里****

A Development of thinking in puberty and its influences on junior high school students' self-esteem and interpersonal relationships.

Hiromichi KATOU, Masayoshi OTA
Mamiko MATSUSHITA, Yuri MITSUI

要 旨

本研究の目的は、思春期における思考の発達過程を明らかにすることと、こうした思考の発達が、自尊心の低下や大人への反抗といったこの時期の諸問題とどのように関係するのかを明らかにすることである。そのために中学生 468 名を対象に、批判的思考態度、自尊心、親との関係、教師との関係を含む質問紙を用いて、2 年間で 5 回の縦断調査を行った。その結果、思考の発達を示す批判的思考態度は、2 年生の後半あたりから上昇する傾向にあることが分かった。また批判的思考態度の発達の状況により生徒タイプを分類し、その後の自尊心などの発達の推移を検討した結果、中学入学時の段階で思考の発達がより進んでいる者ほど、より早く自尊心の低下や大人との関係の良さの低下が生じることが示された。

キーワード：思春期、批判的思考、自尊心、中学生、縦断研究

問 題

思春期は、「不安定さ」によってしばしば特徴づけられる時期であるが、認知発達の側面に注目するなら、思考の様式が大きく変化する時期でもある。例えば、Piaget (1963/1968) の認知発達理論によれば、思春期は具体的操作期から形式的操作期へ移行する時期とされる。この時期の特徴は、「具体的なものへの中心化が解除される」時期であ

り、可能性の世界から現実を批判的に検討できるようになるということにある(中垣, 2011)。言い換えるなら、それ以前は「現実に合わせて、適応する存在」であった者が、それ以後は、「現実働きかけ、変革を促す存在」へと変化するのが思春期であると言える (Piaget, 1970/2007)。

また思春期には様々な「問題」と言われる現象が生じてくるが、それにもこうした思春期における思考の発達が関係していると考えられる。例え

*北海道大学大学院教育学研究院 准教授

**常葉大学教育学部 講師

***静岡大学教育学部附属島田中学校 養護教諭

****静岡大学教育学部附属浜松中学校 養護教諭

ば、思春期に自尊心が低下するという現象は広く報告されているが (Robins, Trzesniewski, Tracy, Gosling, & Potter, 2002; 都筑, 2005)、その理由の1つとして、思考との関連性が指摘されている (Robins & Trzesniewski, 2005)。つまり、可能性の世界から現実を見られるようになるということは、理想から現実を見られるようになる。そして、このような思考が自己に向かえば、自分の否定的な側面にも目が向くようになり、自尊心が不安定になるというわけである (渡辺, 2011)。また第二次反抗期という言葉で表される「権威や大人への反抗」についても、同様の説明がしばしばなされてきた。すなわち、思春期に理想という視点から親や教師といった大人を見られるようになることで、現実の親や教師は、時に批判や反抗の対象になるというような説明である (渡辺, 2000)。またこの時期は、論理的な思考が発達するため、様々な言明に対しても、それを「誰が言ったのか」ということよりも、「論理的に正しいのか」という視点から判断することができるようになり、相手の言明に含まれる矛盾に敏感になる時期でもある (Vygotsky, 2004)。これも今までは「親や先生の言うことだから」ということで受け入れていたことを、子どもが単純には受け入れなくなる、あるいは逆に矛盾をついてくるようになるという意味で、反抗期を形成することと関連していると考えられる。

しかし、このように思春期における様々な問題と思考の発達の関連性が指摘される一方で、そもそも思春期の思考の発達についての研究が少なく (山, 2012)、実際のところ思春期の子どもたちの思考にどのような変化が生じるのかということはいまだあまり分かっていない。さらに思春期の思考の発達とこの時期の諸問題との関連を実証的に扱った研究も少ない。例えば、加藤・太田・松下・三井 (2013) は、中学生の思考と自尊心の関係を検討し、ピアジェの理論から予想されるのとは逆に、両者の間には正の相関があることを明らかにしている。しかし、この横断研究であるため、思考の発達が自尊心に及ぼす中長期的な影響については検

討されていない。そこで本研究では、中学生を対象に縦断的な質問紙調査を行うことで、思春期に思考がどのように発達するのか、またその発達が自尊心の低下や大人への反抗といったこの時期に生じる問題にどのように関連しているのかについて検討する。

具体的には、思考の発達については、批判的思考態度 (平山・楠見, 2004) を取り上げ、その発達について検討する。批判的思考とは、自分の推論過程を意識的に吟味する反省的な思考であり (Ennis, 1987)、自分の意見と一致しない時でも、その気持ちを入れることなく推論する思考である (Norris & Ennis, 1989)。こうした批判的思考の発達には、ピアジェの認知発達段階論における具体的操作期から形式的操作期への以降が深く関わっているとされている (楠見, 2011)。また批判的思考態度とは、批判的に考えようとする態度や傾向性のことを指し (平山・楠見, 2011)、批判的思考を行う能力があるか否かを問うだけではなく、それを実際に使用しようとしているか否かを問題にする概念である。

以上をふまえ、本研究では、この批判的思考態度に焦点をあて、その中学生における発達の推移を明らかにし、自尊心、親や教師との関係を検討する。それにより思春期における思考の発達と自己および人間関係の関連性について明らかにしていく。

方 法

(1) 調査協力者

A 県の公立中学校 2 校の中学生、468 名のうち 5 回分の調査データが揃っている 425 名を分析対象とした。対象としたのは、平成 23 年度に入学した生徒 (以下、H 23 年度生) と平成 24 年度に入学した生徒 (以下、H 24 年度生) で、内訳は H 23 年度生が男子 108 名、女子 113 名、計 221 名。H 24 年度生が男子 97 名、女子 107 名、計 204 名であった。

(2) 調査内容

学年、クラス、性別に生年月日と所属している部活動名を記入するフェイスシートに加え、以下の尺度を用い、質問紙による調査を実施した。また2年目以降は前年度在籍していたクラスについてもたずねた。

①自尊心：Rosenberg (1965) を参考に、都筑 (2005) が使用した項目に1項目を加え、5項目を使用し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

②批判的思考：平山・楠見 (2004) の批判的思考態度尺度と前田・新見・加藤・梅津 (2010) を参考に、平山・楠見 (2004) で見いだされた4つの因子について3項目ずつ抽出した。また平山・楠見 (2004) が高校生以上を対象としているため、文章表現については、実施校の教員と相談の上、前田・新見・加藤・梅津 (2010) を参考にし、中学生に理解しやすい形に表現を改めた。こうして作成した全12項目に対し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

③友人関係：榎本 (2003) の「友人に対する感情」より「信頼・安定」、「不安・懸念」、「独立」の各因子から2項目ずつ選び、計6項目に「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

④親子関係：大久保・青柳 (2003) の5項目を使用し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

⑤教師との関係：大久保・青柳 (2003) の5項目を使用し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

(3) 調査時期と縦断データの追跡方法

2012年4月～2013年10月の間に5回の調査を行った。具体的な調査時期については、第1回調査が2012年4～5月、第2回調査が2012年10月、第3回調査が2013年2月、第4回調査が2013年5月、第5回調査が2013年10月であった。したがって、H23年度生については、2年生1学期

から3年生2学期までを、H24年度生については、1年生1学期から2年生2学期までを追跡したことになる。

調査協力者を追跡するために、同一年度内は学年、クラス、性別、生年月日、部活動によって協力者を同定し、データの一致を図った。年度をまたぐ際には、さらに前年度に在籍していたクラスの組番号についてもたずね、協力者の同定、データの一致を図った。

結 果

(1) 批判的思考態度の構造

批判的思考態度については、大学生を対象とした平山・楠見 (2004) では、「論理的思考への自覚」、「探究心」、「客観性」、「証拠の重視」という4つの因子が抽出されている。そこで中学生でも同様の因子構造を想定することができるかを検討した。まず批判的思考態度尺度12項目について、平均値と標準偏差を求め、フロア効果、天井効果がみられないかを検討した。その結果、「探究心」因子に分類されていた「いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい」と「自分とは異なる考えの人と議論するのは面白い」の2項目で天井効果が認められた。したがって、これら2項目を分析から除外することとした。

次に残りの10項目に対し、因子分析（最尤法、Promax 回転）を行い、2因子を抽出した (Table 1)。第1因子には、先行研究 (平山・楠見, 2004) の「探究心」、「客観性」、「証拠の重視」の因子に対応する項目がまとまった。この因子に含まれた項目全体のイメージから客観的態度がもっとも共通すると考え、「客観的態度」因子と名づけた。第2因子は、先行研究 (平山・楠見, 2004) の想定通りのまとまり方を示したため、先行研究同様の「論理的思考への自覚」因子とした。

因子間相関は、0.68であり、2つの因子のあいだにはそれなりの関連性がみられた。また信頼性を確かめるために、Cronbach の α 係数を算出したところ、「客観的態度」因子は0.72、「論理的思

Table 1 批判的思考態度の因子分析の結果（最尤法、Promax 回転）

	客観的態度	論理的思考 への自覚
判断をくだす際は、できるだけ多くの事実や証拠を調べる	0.70	-0.01
1つ2つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	0.65	0.03
結論をだす場合には、確かな証拠があるかないかにこだわる	0.55	-0.05
いつもかたよりのない判断をしようとする	0.41	0.05
自分とは違う考えの人に興味を持つ	0.38	0.19
たとえ意見が合わない人の話にも耳をかたむける	0.36	0.12
考えをまとめることが得意だ	-0.11	0.86
誰もが納得できるような説明をすることができる	0.07	0.78
複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ	0.22	0.49
因子間相関	0.68	
α 係数	0.72	0.79

考への自覚」因子は0.79であった。

生のコホートで見るなら、客観的態度は2年生から3年生にかけて高まっていくと考えられる。

(2) 批判的思考態度の発達の推移

①客観的態度の発達

Figure 1 に客観的態度因子の1項目あたりの平均値の推移を示した。H 24 年度生では大きな変化はみられなかったが、H 23 年度生では2年生の2学期以降から上昇する傾向がみられた。入学年度(2)×性別(2)×客観的態度(5)で分散分析を行ったところ、入学年度と客観的態度の交互作用が認められた ($F(4, 1684)=8.20, p<0.01$)。単純主効果の検定を行ったところ、H 23 年度生において有意な差が認められ ($F(4, 1684)=11.34, p<0.01$)、多重比較の結果、H 23 年度生の2年1学期に比べ、3年2学期の得点が高いこと、また2年2学期、3学期に比べ、3年1学期と2学期の得点が高いことがわかった。つまり、H 23 年度

②論理的思考への自覚の発達

Figure 2 に論理的思考への自覚因子の1項目あたりの平均値の推移を示した。H 23 年度生でみると男女で同じような推移のパターンを示しているが、H 24 年度生では、男女で異なる推移のパターンを示している。入学年度(2)×性別(2)×論理的思考への自覚(5)で分散分析を行ったところ、入学年度と論理的思考への自覚 ($F(4, 1684)=4.64, p<0.01$)、性別と論理的思考への自覚の交互作用が認められた ($F(4, 1684)=6.77, p<0.01$)。単純主効果の検定を行ったところ、H 24 年度生において有意な差が認められ ($F(4, 1684)=11.34, p<0.01$)、多重比較の結果、H 24 年度生の1年生1学期に比べ、1年3学期で、1年2学

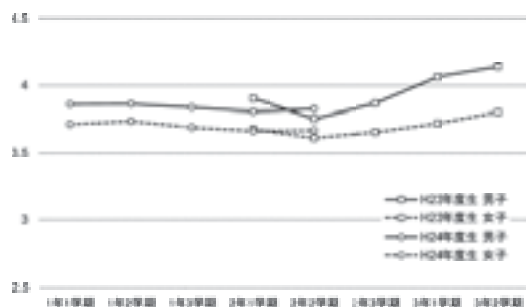


Figure 1 客観的態度の発達の推移

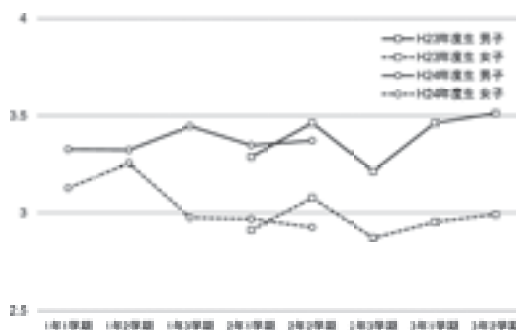


Figure 2 論理的思考への自覚の発達の推移

期と1年3学期、2年1学期、2年2学期で有意な差が認められた。つまり、H24年度生のコホートで見るなら、1年2学期から3学期以降に変化が見られ、男子ではいったん上昇し、再び下降、維持という推移をたどるのに対し、女子では、低下していく傾向が見られた。またすべての時期において男女差が認められたが、女子においてはさらに時期による差が認められた ($F(4, 1684) = 9.67, p < 0.01$)。多重比較の結果、女子はH24年度生では1年2学期とそれ以外の時期、H23年度生では2年2学期とそれ以外の時期に差が認められた。

(3) 自尊心・親との関係・教師との関係の発達の推移

①自尊心の発達

Figure 3 に自尊心の平均値の推移を示した。入学年度(2)×性別(2)×自尊心(5)で分散分析を行ったところ、入学年度と論理的思考への自覚($F(4, 1684) = 4.64, p < 0.01$)、入学年度と性別と自尊心の交互作用が認められた ($F(4, 1684) = 2.42, p < 0.5$)。発達の推移に関連するところについて単純主効果の結果を検討すると、発達の推移に有意な差が認められたのは、H24年度生であり、男子は1年3学期から2年1学期で差がみられ、この時期に自尊心が下がっていることが分かる。また女子は1年1学期からみていずれの時期の間にも有意な差が認められた。つまり、H24年度生女子の自尊心は、中学入学後から2年2学期まで概ね低下し続ける傾向にあることが分

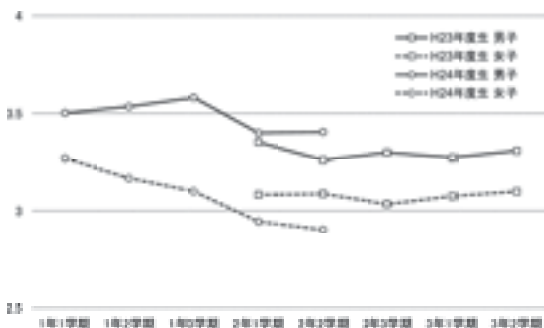


Figure 3 自尊心の発達の推移

かる。

②親との関係の発達

Figure 4 に親との関係の平均値の推移を示した。入学年度(2)×性別(2)×親との関係(5)で分散分析を行ったところ、入学年度と親との関係の交互作用が認められた ($F(4, 1684) = 4.26, p < 0.01$)。単純主効果の検定を行ったところ、H24年度生において有意な差が認められ ($F(4, 1684) = 10.18, p < 0.01$)、多重比較の結果、H24年度生の1年1学期と2学期に比べ、2年1学期・2学期で、1年3学期と比べ、2年2学期で有意な差がみられ、1年生から2年生を通じて親子関係が低下していく傾向にあることが分かる。

③教師との関係の発達

Figure 5 に教師との関係の平均値の推移を示した。入学年度(2)×性別(2)×教師との関係(5)で分散分析を行ったところ、入学年度と教師との関係の交互作用が認められた ($F(4, 1684) = 16.25,$

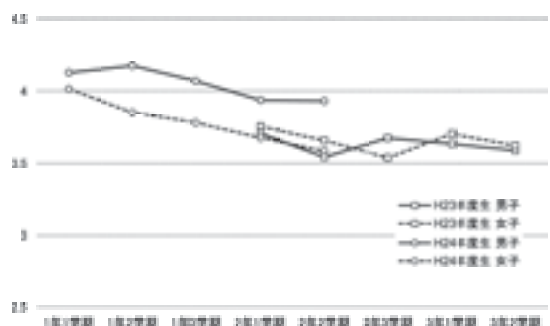


Figure 4 親との関係の発達の推移

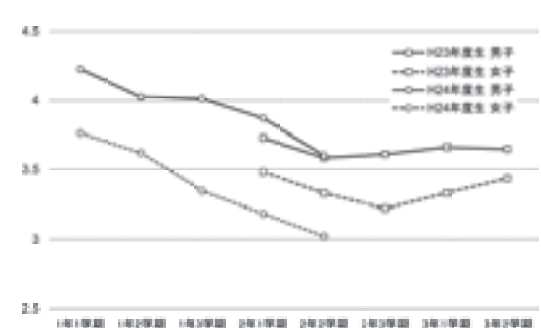


Figure 5 教師との関係の発達の推移

$p < 0.01$)。単純主効果の検定を行ったところ、H 23 年度生においても ($F(4, 1684) = 2.54, p < 0.5$)、H 24 年度生においても有意な差が認められた ($F(4, 1684) = 32.89, p < 0.01$)。多重比較の結果、H 23 年度生では 2 年 1 学期と 2 年 3 学期の間に有意な差が認められた。また H 24 年度生では、1 年 1 学期とすべての時期において、1 年 2 学期と 2 年 1 学期・2 学期で、1 年 3 学期と 2 年 2 学期、2 年 1 学期と 2 学期の間に有意な差が認められた。H 23 年度生は 2 年 3 学期を底に教師との関係が改善するのに対し、H 24 年度生は入学後から一貫して教師との関係が低下し続けていることが分かる。

(2) 批判的思考態度と自尊心・人間関係との関係

ここでは思春期の思考の発達が生徒の自尊心や人間関係にどのような影響を及ぼすのかを検討する。これまで 1 時点での横断的な研究により、自尊心と思考の発達の関連性は検討されてはいるが(加藤・太田・松下・三井, 2013)、思考の発達(深まり)が中長期的に、子どもの自己や人間関係にどのように影響を及ぼすのかということは明らかにされていない。また、思春期以降の発達については、個人差の拡大が指摘されている。したがって、単一路線的に発達をとらえるのではなく、複線的に発達をとらえる必要があると考えられる。そこで本研究では、第 1 回調査時の批判的思考態度の発達のあり方によって、生徒のタイプを分類し、その違いによってその後、自尊心や親との関係、教師との関係がどのように推移するのかについて検討する。それによって思考の発達と自己、人間関係の発達がどのように関連しているのかを明らかにしていく。

① 批判的思考態度による生徒のタイプ分類

思考の発達に応じて生徒のタイプを分類するために、客観的態度因子と論理的思考への自覚因子の 1 項目あたりの平均値を標準化し、Ward 法を用いたクラスター分析を行った。各クラスターに含まれる調査協力者数、クラスターの解釈可能性

などから総合的に判断した結果、3 クラスターによる分類が批判的思考態度の特徴を最もよく表していると考えられた (Figure 6)。各クラスターの特徴は以下の通りである。

第 1 クラスター (H 23 年度生 34 名、H 24 年度生 38 名、計 72 名)：客観的態度、論理的思考への自覚がともに平均よりも低い群 (以下、低群)。

第 2 クラスター (H 23 年度生 160 名、H 24 年度生 123 名、計 283 名)：客観的態度、論理的思考への自覚がともに平均の群 (以下、中群)。

第 3 クラスター (H 23 年度生 27 名、43 名、70 名)：客観的態度、論理的思考への自覚がともに平均よりも高い群 (以下、高群)。

② 批判的思考態度の発達と自尊心の関係

思考の発達と自尊心の関係を検討するために、批判的思考態度の発達の仕方によって、自尊心(の平均値)がどのように推移するかを Figure 7 に示

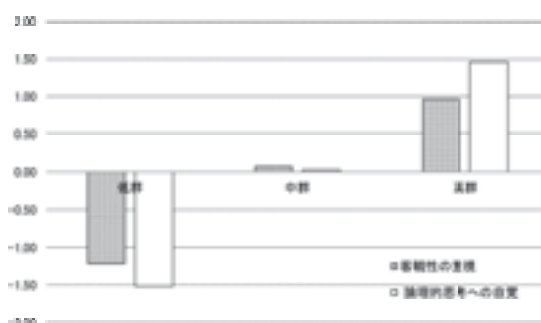


Figure 6 批判的思考態度尺度のクラスターごとの特徴

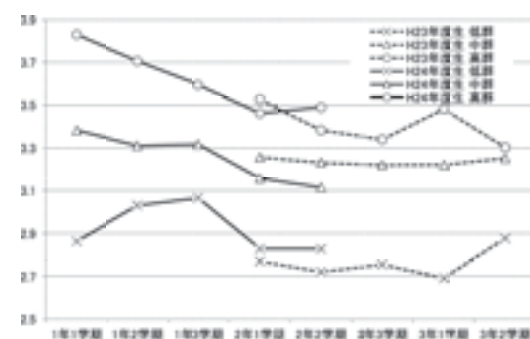


Figure 7 批判的思考態度のクラスターごとによる自尊心の推移の違い

した。その結果、第1回調査時に批判的思考態度の高群の自尊心がその後、低下していくことが分かる。

またH24年度生に注目すると、批判的思考態度の発達の程度に応じて、自尊心の推移パターンに違いが見られる。第1回調査時に批判的思考態度が高群だったクラスターにおいては、その次の第2回調査時から低下が始まるのに対し、中群においては、少し遅れて第4回調査時（2年1学期）から顕著な自尊心の低下が起きている。また低群については、第2回、第3回調査時（つまり、1年次）においてはいったん自尊心が上昇する傾向がみられ、その後、低下に転じている。

こうした自尊心の推移パターンの違いとそれぞれのクラスターの批判的思考態度の発達がどのように関連しているのかをさらに検討するために、Figure 8とFigure 9にクラスターごとの客観的態度と論理的思考への自覚の平均値の推移を示し

た。

明確な対応関係ではないものの、H24年度生の低群については、客観的態度、論理的思考への自覚ともに、1年2学期と3学期にかけて上昇する傾向が見られる。H24年度生低群の自尊心の低下が、批判的思考態度が上昇した後の1年3学期から2年1学期で生じていることを考え併せると、思考の発達（深まり）が、自尊心の低下に何らかの影響を与えていることが推測される。

③批判的思考態度の発達と親・教師との関係

自尊心と同様に、思考の発達と人間関係のあり方の関係を検討するために、批判的思考態度の発達の仕方によって、親との関係、および教師との関係の平均値が、どのように推移するかをFigure 10とFigure 11に示した。その結果、親との関係については、高群についてはH23年度生、H24年度生ともに、時間とともに関係性が低下していく

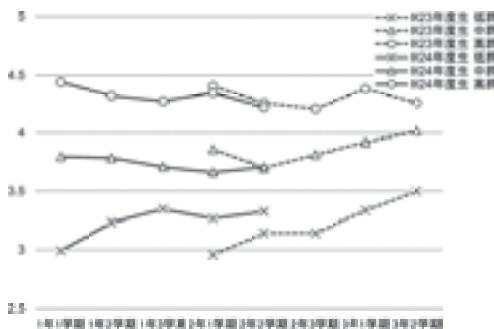


Figure 8 批判的思考態度のクラスターごとの客観的態度の推移

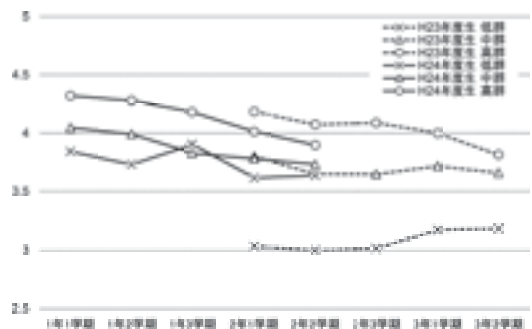


Figure 10 批判的思考態度のクラスターごとの親との関係の推移

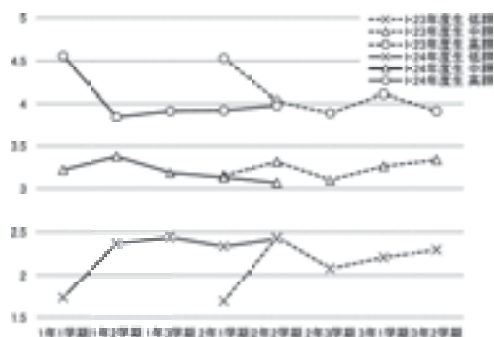


Figure 9 批判的思考態度のクラスターごとの論理的思考への自覚の推移

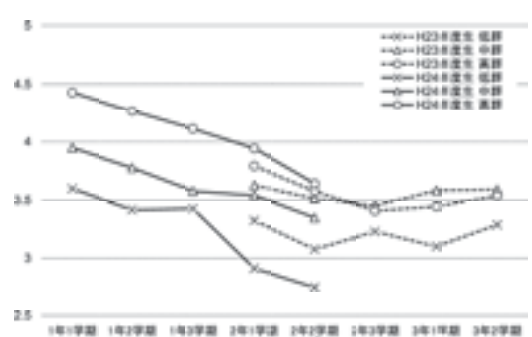


Figure 11 批判的思考態度のクラスターごとの教師との関係

変化が見られるものの、中群については、H 23 年度生ではほぼ横ばいの状態であった。また低群については、H 23 年度生と H 24 年度生で推移のパターンに連続性が見られなかった。しかし、自尊心同様、低群については 1 年 3 学期から 2 年 1 学期にかけて、親子関係の低下が見られることから、思考の発達との関連性が推測される。

教師との関係については、H 23 年度生では大きな変化はみられないが、H 24 年度生ではいずれの群も低下していく傾向がみられた。特に低群においては、自尊心、親との関係同様、批判的思考態度の得点が上昇した後の 1 年 3 学期から 2 年 1 学期にかけての低下が著しい。したがって、H 24 年度生の教師との関係の推移のあり方には、思考の発達が何らかの影響を与えているのではないかと推測される。

考 察

本研究では思春期における思考の発達とそれが自己や人間関係に与える影響について、中学生を対象に行った縦断調査の結果をもとに検討してきた。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) 批判的思考態度の構造

まず中学生における批判的思考態度の構造については、「客観的態度」と「論理的思考への自覚」の 2 因子構造であることが明らかになった。これまで大学生を対象にした研究（平山・楠見，2004）では 4 因子構造が抽出され、中学生を対象にした研究（安藤・池田，2010；安藤・池田，2012）でも 4 因子構造が仮定されてきた。しかし本研究の結果はそれとは一致しなかった。安藤・池田（2010）は、中学生の批判的思考態度の因子構造を検討した数少ない研究である。しかしその一方で、中学 1 年生のみを対象とし、サンプル数が少ないこと、また因子分析の結果についても信頼性係数が低く、項目数が少ない因子があるという問題点も抱えている。本研究に関しては、対象者数の問題はクリアしているものの、項目数については、平山・

楠見（2004）で想定されるすべての項目を使用しておらず、包括的な検討ができていないという問題点を抱えている。したがって、中学生の批判的思考態度の構造については、それ自体をさらに検討していく必要があるとともに、発達に応じて、構造が変化する可能性まで含めて検討していく必要があると思われる。

(2) 批判的思考態度の発達

次に批判的思考態度の発達の推移については、「客観的態度」については、H 23 年度入学生においては、2 年 3 学期あたりから男女ともに上昇する傾向がみられた。それに対し H 24 年度生においては、いずれの期間においても差がみられず、大きな変化がみられなかった。以上の結果から推測されることは、客観的態度に関しては、中学 2 年生の 2 学期あたりから発達し始める可能性である。ただし、これらの結果は、異なるコホートから得られた結果であるため、こうした予想は単に H 23 年度生のコホートの特徴を示しているだけかもしれない。したがって、今後、H 24 年度生にも同様の変化が見られるか引き続き、調査をしていく必要がある。

「論理的思考への自覚」については、H 24 年度生において 1 年 2 学期から 1 年 3 学期にかけて、男子は上昇したのに対し、女子は下降するという男女で異なる推移パターンを示した。H 23 年度生については、統計的に有意な差はみられなかったが、2 年 3 学期以降は上昇する傾向が見られた。このことから、論理的思考への自覚の発達については、コホートによる推移パターンに違いがあることが推測される。つまり、H 24 年度入学生では、変化の推移パターンが男女によって異なっていた。それに対し、H 23 年度生では、男女差は見られるものの、推移パターンは同じかたちをたどるものであった。この違いを、学年による違いなのか、コホートによる違いなのかについては、客観的態度同様さらに調査を継続して行う必要がある。

(3) 思考の発達が自己および人間関係に与える影響

最後に、批判的思考態度の発達が自尊心や人間関係に与える影響についてである。まず自尊心については、第1回目の調査時において、客観的態度、論理的思考がともに高い、高群については、H 24 年度生のコホートにおいて顕著に自尊心が低下していく傾向がみられた。また中群においても高群に比べ、低下の開始時期がやや遅れるものの、同様の傾向がみられた。さらに低群においてはいったん上昇するが、後に低下傾向に転じるという他の群とは異なるパターンがみられた。またこの低群における自尊心の推移パターンは、客観的態度、論理的思考への自覚の推移パターンとある程度対応するものであった。つまり、第1回目の調査時に客観的態度、論理的思考への自覚が低かった者においては、いったん自尊心が上昇する傾向がみられたものの、客観的態度、論理的思考への自覚が高まった後には、逆に自尊心が低下する傾向に転じていたのである。したがって、このことは思考の発達により自尊心の低下が生じる可能性を示唆していると考えられる。

親との関係については、H 23 年度生も H 24 年度生もともに、客観的態度、論理的思考が高い高群においては、得点が低下する傾向がみられた。中群においては高群ほど顕著ではないものの、徐々に親との関係の得点が低下する傾向がみられた。つまり、中群、高群については、思考の発達と親との関係をより否定的にとらえる傾向が関連していると考えられる。また低群については、H 23 年度生と H 24 年度生で大きな違いがあったが、H 24 年度生については、親との関係の得点が1年2学期から1年3学期にかけて上昇するという傾向がみられたが、自尊心同様、批判的思考態度が高まった後に、下降していく傾向がみられた。

最後に教師との関係は、H 23 年度生については、顕著な傾向はみられなかったが、H 24 年度生については、教師との関係が期間を通じて徐々に低下していく傾向が見られた。特に低群については、自尊心、教師との関係同様、批判的思考態度

が高まった後の下降が著しくなっていた。

(4) 思考の発達と思春期の諸問題

以上のことをふまえ、以下では思春期における思考の発達と諸問題の関係について考察を加えていく。

これまで批判的思考態度と自尊心の関係を横断的に検討した研究（加藤・太田・松下・三井，2013）では、批判的思考態度の高さと自尊心の高さの間には正の相関が存在するということが報告されていた。この結果は、思考が深まることで自尊心が高まることを意味しており、ピアジェの理論から予想される仮説とは逆の結果であった。しかし、本研究の結果から明らかになったことは、ある時点、特に中学校入学時点での思考の高さが、中長期的には自尊心の低下と関連する可能性があるということである。つまり、思考の発達と自尊心の関係は、共時的には正の相関関係にあるのだろうが、継時的には負の相関関係にある可能性を本研究の結果は示していると考えられる。同様のことは、親や教師との関係にもみられるものであり、その意味で、本研究は、中長期的な視点からピアジェの理論から予想される仮説を支持するものである。したがって、思春期における自尊心の低下や大人への反抗といった現象には、同時期に生じる思考の発達が関係していると考えられる。

さらに上述したような結果は、H 24 年度生において、特に顕著であった。つまり、思考の発達が自尊心の低下や大人への反抗といった問題により関連するのは中学1年生から2年生の時期であることが考えられる。しかし、この点については、異なる2つのコホートから得られた結果であるため、あるコホートの特徴を示しているのか、それとも発達の一般的な傾向を示しているのかは、さらなる縦断的な調査が必要である。

最後に本研究の結果から実践への示唆を行うとするなら、次のような点をあげることができる。すなわち、一般的に思春期は「不安定さ」によってとらえられることが多い（例えば、鶴養，2009 など）。つまり、思春期における様々な問題は、思

考の発達というよりも、思考の混乱や不安定さによって特徴づけられてきたといえる。しかし、本研究の結果が示していることは、それとは逆に思考の深まりによって、自尊心の低下や親や教師への反抗といった一部の問題が生じている可能性である。したがって、本研究の結果は、思春期を「不安定」あるいは危機的時期としてとらえる見方に対して修正を迫る、あるいは新たな見方を提示するものであると思われる (Arnett, 1999)。

文 献

- 安藤玲子・池田まさみ 2010 “クリティカル・シンキング”の育成(2): 中学生用尺度の開発 日本心理学会第74回大会論文集, 1190.
- 安藤玲子・池田まさみ 2012 批判的思考態度の獲得プロセスの検討: 中学生の4波パネルにおける因果分析から認知科学, 19, 83-99.
- Arnett, J. J. 1999 Adolescent storm and stress, reconsidered. *American psychologist*, 54, 317-326.
- Ennis, R. H. (1987). A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron & R. J. Sternberg (Eds.), *Teaching thinking skills: Theory and practice*, 9-26. New York: W. H. Freeman and Company.
- 平山るみ・楠見孝 2004 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響 教育心理学研究, 52, 186-198.
- 平山るみ・楠見孝 2011 批判的思考の測定 楠見孝・子安増生・道田泰司(編) 批判的思考力を育む: 学士力と社会人基礎力の基盤形成 有斐閣, pp.110-138.
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 2013 中学生の自尊心を低下させる要因についての研究: 批判的思考の発達との関連から 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇) 63, 135-143.
- 楠見孝 2011a 批判的思考とは 楠見孝・子安増生・道田泰司編 批判的思考力を育む: 学士力と社会人基礎力の基盤形成 有斐閣, pp.2-24.
- 楠見孝 2011b 生涯にわたる批判的思考力の育成 楠見孝・子安増生・道田泰司編 批判的思考力を育む: 学士力と社会人基礎力の基盤形成 有斐閣, pp.225-237.
- 前田健一・新見直子・加藤寿朗・梅津正美 2012 中学生の批判的思考力と社会的事象に対する関心・意欲および社会的態度 広島大学心理学研究, 10, 89-100.
- 中垣啓 2011 ピアジェ発達段階論の意義と射程 発達心理学研究, 22(4), 369-380.
- Norris, S. P., & Ennis, R. H. 1989 *Evaluating critical thinking*. Pacific Grove, CA: Midwest Publications.
- 大久保智生・青柳肇 2003 中学生の問題行動と学校および家庭環境への適応感との関連 日本福祉教育専門学校紀要, 11, 11-19.
- Piaget, J. 1964 *Six etudes de psychologie*. Gonthier. (ピアジェ, P. (滝沢武久訳) 1968 思考の心理学 みすず書房)
- Piaget, J. 1970 *Piaget's theory* P. H. Mussen (Ed.). Carmichael's manual of child psychology(3rd ed.): Vol. 1. New York: John Wiley & Sons. (ピアジェ, J. 2007(中垣啓 訳) ピアジェに学ぶ認知発達の科学 北大路書房)
- Robins, R. W., & Trzesniewski, K. H. 2005 Self-Esteem Development Across the Lifespan. *American Psychological Society*, 14(3), 158-162.
- Robins, R. W., Trzesniewski, K., Tracy, J. L., Gosling, S., & Potter, J. 2002 Global self-esteem across the lifespan. *Psychology and Aging*, 17, 423-434.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- 都筑学 2005 小学校から中学校にかけての子どもの「自己」の形成 心理科学, 25(2), 1-10.
- 鶴養啓子 2009 思春期女子の心理と行動: 指導, かかわりの難しさの背景にあるもの 児童心理, 892, 17-22.
- Vygotsky, L. S. 2004 (柴田義松・森岡修一・中村和夫訳) 思春期の心理学 新読書社.
- 渡辺弘純 2000 自分づくりの心理学 ひとなる書房.
- 渡辺弥生 2011 子どもの「10歳の壁」とは何か?: 乗り越えるための発達心理学 光文社新書.
- 山祐嗣 2012 青年の認知 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子(編) 発達科学入門 [3] 青年期~後期高齢期 東京大学出版会, pp.3-16.